
ハヤテのごとく！～愛沢 咲夜と愉快的仲間たち～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！～愛沢 咲夜と愉快的仲間たち～

【Nコード】

N6771C

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ヒナギクを一方的に振ったハヤタが咲夜の執事に成って咲夜が恋してなんと咲夜と結婚までしてしまうと言うそんな物語。さて、私は今「咲夜」を何回言った？

Story 01・ハヤタVS伊澄

ハヤタは病院を跡にし、三千院家の自室に戻った。

「別にナギに恨みがある訳じゃねえが、こんな所出てってやる！」

ハヤタそう叫びながら荷物をまとめ始めた。

「とは言う物の、行く当てはあるのか、と」

「知るか！」

ハヤタは天に向かって睨み付けた。

大方、若本ヴォイスでも聞こえたのだろう。

「さて、こんなもんか」

ハヤタは荷物をまとめた旅行鞆を手にし、三千院家を跡にした。

（勢いで出たが、行く当て無えんだよなあ）

はあ・・・ハヤタは溜め息を吐いた。

「ん？」

ハヤタは塀に貼ってある一枚の貼り紙を見付けた。

それは愛沢家の執事募集広告だった。

「こつ、これは！」

ハヤタは愛沢家に向かって駆け出した。

「わっ！」

刹那、ハヤタは石に躓いて転んだ。

その拍子に偶々通り掛かった咲夜の胸に、ハヤタの顔が埋まり、ドミノ倒しの如く倒れた。

「いったあ・・・。アホー！自分、何処見て走ってんねん！？」

「そ、その声はナギの従姉の咲夜か」

「ん？何や、自分やったか」

咲夜がそう言つと、ハヤタが顔を咲夜の顔の前にずらした。

「咲夜、お前に頼みがある」

「・・・ウチを馴れ馴れしく呼び捨てせんで貰えんか？で、頼みて何や？」

その問いにハヤタは真顔で「俺を雇ってくれ」と答える。

「じ、自分、ホンマに言うとなんの・・・？」

と、咲夜は疑問符を浮かべる。

そんなやりとりを勘違いしたのか、必然的に通り掛かった親子が、

「ママー、あのお兄さんが女の子を襲ってる！」

「シート、見ちゃいけません！」

と、ありがちな仕草をした。

「襲って無えよ！」

ハヤタは子どもに妖力波を放った、が、親が速攻でバリアを張った。

「嘘だろ！？」

バリアに因って跳ね返された妖力波が二人に迫る。

「ちよっ、自分、早う何とかせい！」

「おらよ！」

ハヤタは再度、妖力波を放って相殺した。

「俺の必殺技を跳ね返すとはただ者じゃねえな」

「そう言うあなたこそ」

と、子どもの親。

両者は互いに睨み合った。

目から黄色い線が発射され、バチバチと火花を散らす。

「どうでも良えけど自分、早う退いてくれへんか？それと、胸に手が乗っとるで」

その言葉にハヤタは目線を咲夜の胸元にやった。

プニプニ 揉んでみるハヤタ。

「いゃん・・・」

咲夜はやらしい声を上げた。

ハヤタはもう一度揉んだ。

「いゃん・・・自分・・・何揉んでんねんや？」

更にもう一度。

「いゃん・・・アカンって自分・・・」

「うわ、やらしい」

子の親が言った。

「行きましょ」

親子は去って行った。

「なあ、自分？」

「ん？」

「ウチ、もう限界なんや。せやから、その、手、離してくれへん？」

「限界？」

咲夜は頷いた。

「ウチ、気持ち良くて、イッてしまいそうやわあ」

（ヤバ、手が止まんねえ）

「自分、ええ加減に、せい・・・」

咲夜は力を振り絞って、ハリセンでハヤタを叩いた。

バシン！ ハリセンがハヤタの側頭部を直撃した。

「痛！」

ハヤタは手を止めて側頭部を押さえた。

「いきなり何すつ・・・否、止めてくれてありがとな」

「アホー！そないな問題やないでえ！」

バシン！ 咲夜はハリセンでハヤタの頭を叩き付けた。

「痛！」

と、前傾姿勢で頭を抱えるハヤタ。

「自分、何でこないな事したんや？」

「何と無く」

はあ・・・ 咲夜は溜め息を吐いて肩を落とした。

「何と無くって何やねん！？」

「手が勝手に動いたんだ」

「そないな事あるかボケエ！」

咲夜は再びハリセンで叩いた。

「痛えな、何で叩く？」

「ウチは別に叩いておらんで。突っ込んだだけや。で、執事募集の

話しなんやけどな、どや？茶でも一杯飲みながらうちうんで」

「あ、忘れてた」

「忘れてたんか！？まあ良えわ。ほな、その店入るで？」

咲夜はそう言って反対側の歩道横にある喫茶店を指差した。

「何やってんねん？早うせい」

と、先に渡り始めた咲夜が途中で振り返って手招きをすした。

プーッと鳴り響くクラクション。

咲夜は振り向いた。

猛スピードで迫る大型トレーラー。

「危ない！」

と、ハヤタが慌てて飛び出し、咲夜を捕まえてトラックの前を横切った。

キー！　急ブレーキを掛けたトラックがタイヤの痕を路上にクツキリ残して止まった。

「いきなり飛び出して危ねえだろ！」

と、サングラスを掛けた禿げの運転手が窓を開けて顔を出して叫ぶ。

ハヤタは運転手を睨んだ。

「な、何だ？」

「・・・りる・・・」

ハヤタは呟いた。

「はあ？」

「降りろって言ってたんだよハゲ！」

「何だてめえ！？」

と、ハゲはトレーラーから降りてハヤタに歩み寄って頭にゲンコツをお見舞いした。

「俺が一番気にしている事言いやがって！」

そう言ってもう一発殴り掛かるハゲ頭。

ハヤタは素早く避け、足払いを掛けて倒し、ハゲ頭の胸倉を掴んだ。

「てめえ、自分が何したか解ってんのか！？人一人撥ねっ所だったんだぞ！」

「つつ立ってんのが悪い」

ブン！ ハヤタはハゲ頭の顔面を殴り付けた。

「おいハゲ、道路交通法つての知ってるか？」

「知らねえな」

ハヤタはもう一発殴った。

「人を撥ねたら違反で罰金だ。が、それは単なる事故の場合。貴様のは明らかに殺意があつたからな。傷害か殺人の罪に問われてただらうな」

「だから何だ？今時人一人殺したって死刑には成んねえんだよ」

ハヤタはまた殴った。

「そうか、そんなに殺されてえか。なら殺してやるよ」

ハヤタはそう言つて、右手を竜の手に変化させた。

「この手は人間の物じゃねえからな。俺が殺つたと言う証拠は一切残らねえ」

「バカか？そいつが見てるぞ」

ハヤタは傍観者である咲夜をチラツと見た。

「う、ウチは何も見とらんで」

咲夜はそう言つて横を向いた。

「と言う訳で目撃証言も無しだ」

ハゲ頭は恐怖で震えて鳥肌が立ってしまった。

「お、俺が悪かった！謝る！だから許してくれ！」

ハヤタは竜の爪をハゲ頭の首に当てがった。

その時、何処からともなく、お札が飛来して竜の手に貼り付いた。

「八葉六式、撃破滅却」

刹那、ハヤタの竜の手が爆発と共に粉々に破碎された。

「うわああああ！」

ハヤタは激痛に襲われ、手首を押さえて悲鳴を上げた。

「だっ、誰だ・・・！？」

ハヤタはお札が飛んで来た方に激痛で引き攣る顔を向けた。その先には、和服姿の少女がいた。

「きつ、貴様は八葉六式使い、鷺^{はるのみや}ノ宮 伊澄！」

「何や、二人とも知り合いなんか？」

と、咲夜が横槍失礼した。

「俺の邪魔をする気か？」

「どんな理由があろうとも殺させはしないわ。妖怪さん、覚悟して下さい」

伊澄はそう言ってお札を投げた。

「八葉六式」

「ちよい待てえ！」

ハヤタはハゲ頭を盾にした。

「爆破滅却」

刹那、ハゲ頭に貼り付いたお札が爆発し、ハゲ頭は爆裂霧散した。

「あらまあ、人を殺してしまいましたわ。どうしましょう？」

伊澄はオロオロし始めた。

「知るか！つうか俺は妖怪じゃねえつ、歴とした人間だ！」

その発言を伊澄は、しゃんとして構え、真顔で否定した。

「いいえ、あなたは人の皮を被った妖怪です」

その直後、伊澄は咲夜に顔を向けた。

「咲夜、その人から離れて」

「何でや？」

と、疑問符を浮かべる咲夜。

「その人は妖怪だから」

「伊澄、ハヤタはんを倒す言っんか？」

「ええ」

「せやったらウチがハヤタはんを守る！ハヤタはんが轢かれそうや
つたウチを助けてくれはった様に、ウチが助けるんや！」

咲夜はそう言ってハヤタの前に出、手を大きく横に広げて仁王立ちした。

「退いて咲夜。それではお札が投げられない」

「嫌や！伊澄がハヤタはんを殺るっちうなら、ウチを倒してからにせい！」

「咲夜……。妖怪に操られてしまっているのね。でも大丈夫、直ぐに助けてあげるわ」

「何言うてんねん！？ウチは操られてなんかおらんで！これはウチの意思や！」

「操られている者は皆そう言つのよ」

伊澄はそう言ってお札を投げて咲夜に貼り付けた。

「八葉六式、撃破滅却一兆分の一」

その詠唱と共に咲夜に貼られたお札が小爆発。

「わあっ！」

咲夜は悲鳴を上げて気絶した。

「咲夜！」

と、ハヤタは倒れる咲夜を支えた。

「すっかりしろ咲夜！」

しかし、咲夜は無反応。

「咲夜……」

ハヤタ咲夜を抱き抱え、「仇は取る」と言って降ろし、仰向けに寝かせた。

「うおおおお！」

ハヤタは雄叫びを上げて竜の手を再生させ、目にも留まらぬ速度で伊澄に迫り、竜の手で伊澄の体突き抜いて魂だけを吹っ飛ばした。
ドラゴンハンド

「この手は霊体だから現世の物には触れる事は出来んが、霊体には攻撃が出来る……。この手で貴様の魂を消滅させてやる！」

ハヤタはそう言っ伊澄の霊体に襲い掛かった。

伊澄の霊体は咄嗟にお札を投げた。

「八葉六式、撃破滅却」

ドーン！ お札はハヤタの眼前で大爆発を起こした。

「うわああああ！」

ハヤタは爆風で吹っ飛び、地面に落下して数回転がった。

（つ、強すぎる……。勝てるのかっ、俺に！？）

ハヤタは咲夜を見た。

（そうだっ、勝たなきゃいけないんだ！例えこの身が滅ぼうとも、体張って俺を守った咲夜を、咲夜の仇は必ず取る！）

ハヤタは蹠跟めきつつ立ち上がり、妖刀・かまいたち（真剣モード）を召喚して掴んだ。

「あら、その刀はかまいたち。霊体ならどんな者でも斬れると言う……。あなたが持っていたのね」

「その口振りじゃ知ってる様だな」

「知ってますわ。それを封印したのは、この私ですから。でもそれは、自宅の蔵にしまっておいた筈……。一体どう言うルートで？」

「知らねえな、気が付いたら俺が持ってた」

「まあ、良いでしょう。その刀、あなたを倒して取り返します」

「させるか！」

ハヤタは伊澄に駆け、水平斬りを放った。

伊澄はお札を投げ、

「八葉六式、撃破滅却」

と、大爆発させる。

「うわああああ！」

ハヤタは再び飛ばされた。

（クソッ、やっぱアレしか無えか！）

「行くぜ！」

ハヤタは体制を立て直し、かまいたちを正面に突き出した。

「卍……。解！」

刹那、かまいたちが紫色のオーラに包まれ、ままだのかまいたち禍殿鎌鼬に変化した。

「それは、一体何でしょう……？」

「ほお、封印した本人ですら解らんか。こいつは禍殿鎌鼬と言っ
な、かまいたちの真の姿だ」

そうハヤタが説明していると、伊澄がお札を投げ飛ばして来た。

「八葉六式、撃破滅却」

刹那、お札がハヤタの眼前で大爆発した。

「ぐっ！」

ハヤタは飛ばされない様に踏ん張った。

（クソ、ガードだけで一杯一杯だぜ）

「ぐはっ！」

ハヤタは吐血した。

（ヤバイ、マジで負ける！）

ハヤタは勝てる見込みが無い事に絶望した。

「あなたはもう終わりです！」

伊澄はそう言っただけで最後のお札を投げた。

「八葉六式、撃破滅却！」

ドカーン！ お札が大爆発し、爆風に因ってハヤタは吹っ飛んだ。

「うわああああ！」

ハヤタ、残りHP1。

（くっ・・・この体はもう駄目だ！）

ハヤタは、ドラゴンハンド竜の手で自分を無理矢理肉体から押し出して魂だけの

存在に成った。

（鷲ノ宮の肉体・・・あれさえあれば俺は！）

ハヤタは伊澄の肉体目掛けて飛行した。

「いけません」

伊澄は慌てて肉体まで駆ける。

「それは俺の物だ！」

ハヤタは伊澄と同時に、伊澄の肉体へと入り込んだ。

しかし、伊澄の霊力の方が上で、ハヤタは伊澄の肉体から弾き出されてしまった。

「あなたでは勝ち目はありませんわ」

「クソツタレ！」

ハヤタは妖力波を放った。

「お返しします」

伊澄はバリアを張り、妖力波を跳ね返した。

「うわっ！」

ハヤタは間一髪で妖力波を避けた。

「なかなかやるな、鷲ノ宮 伊澄」

「あなたの方こそ、頑張りましたわ」

「正直、俺を此処まで追い詰めたのはお前が初めてだ……。悔しいが、今回は敗けを認めてやる。だがな、これだけは覚えておけ。

何時か絶対、俺はお前に勝ってやる」

「楽しみにしてます。では私はナギの所へ行くのでこれで失礼します」

伊澄はそう言ってお辞儀をすると、西の方へ向かって行った。

「待て」

ハヤタは伊澄を呼び止めた。

伊澄は振り向いて、「まだ何か？」と訊ねる。

「否、三千院家は反対だぞ」

「そうですか。態々有り難う御座います」

伊澄はそう言って三千院家に向かった。

ハヤタはボロボロに成った自分の肉体に戻り、咲夜に駆け寄って揺さぶった。

「起きろ咲夜」

「ん……。んん？」

咲夜は目を開けた。

「ウチ、生きてたんやな？」

「鷲ノ宮が加減したからな」

「せやっ、伊澄はどないした！？」

咲夜はそう言って起き上がり、辺りを見回した。

「鷲ノ宮は三千院の屋敷に行った」

「そか……。そないな事より自分、ボロボロやで？」

「鷲ノ宮と一戦したからな」

「で、勝ったんか？」

「敗けたよ。あいつ強えんだ」

「何や、敗けたんか……。まあ良えわ。喫茶店入るで？」

咲夜はそう言っ立ち上がり、喫茶店へと入店した。

喫茶店に入ると、既に咲夜が場所を取っていた。

「此処や此処や！」

と、手招きする咲夜。

ハヤタは咲夜の下へ行き、向かい合つて座つた。

咲夜はメニューを取り、ハヤタの前に置いた。

「ウチの奢りや。自分、好きな物選んで良えで」

「ああ、じゃあ珈琲で」

咲夜は店員を呼び付け、珈琲を注文した。

「ほんで自分、ウチの執事に成りたいんやな？」

「駄目か？」

「別に構わんで。丁度今、巻田も国枝も病気で入院しとるし、その間やけやったら」

「その間つて、そいつら退院したらどうなるんだ？」

「自分の働き具合に因るで。まあ、巻田と国枝は一流やからなあ。

自分にそれ以上の働きが出来るとは……」

「そうか」

ハヤタは自信に満ちた表情をした。

S t o r y 0 2 ・臨時執事ハヤタと咲夜の思ひで（前書き）

表示されるかな？

Story 02・臨時執事ハヤタと咲夜の思ひで

三千院家の屋敷から少し離れた所に、愛沢家の屋敷はある。

ハヤタと咲夜はその屋敷の空き部屋にいた。

「此処が今日から自分の部屋や、好きに使って構わんで。ほな、次はウチの部屋を案内するで」

と言う訳で咲夜の自室。

「此処がウチの部屋や。ウチの部屋は本来どなたはんも入れへんけど、特別に自分だけ入れてあげまんねん」

咲夜はそう言つて、ベッドに駆けて横に為った。

「どや、ついでに先刻の続きやつてやるか？」

「先刻の続き・・・？」

ハヤタは手の平を見詰めた。

（成る程、咲夜は俺を誘つてんのか）

「よっしゃ、行くぜ咲夜！」

ハヤタは咲夜に飛び込んだ、が、咲夜はひよいと避け、ベッドから降りた。

「冗談や。そないな事したら桂はんはんに怒られてしまうわ」

「・・・別れたよ」

「へっ？自分、今何て言うたん？」

「だから、ヒナギクとは別れた、と・・・」

それを聞いた咲夜は吃驚仰天、「ホンマかそれ！？」と、素っ頓狂な声を上げた。

「何で別れたんや？」

「それが色々あるんだよ」

「そうか・・・。その話し、ねちっこく聞いても良えか？」

ハヤタは一旦考えてから咲夜に話した。

「成る程な。それは自分が悪いで」

ガン！　ハヤタはショックを受けて暗く成った。

「あ、スマンスマン。そないな凹まないでおくんなはれ」
しかし、ハヤタの様子は変わらず。

「せや！自分、ウチの男に成らへんか？」

はっ！？　ハヤタは驚いた。

「ウチ、始めて自分と会った時から、自分の事好きに為ってしもうたんや。せやから自分、ウチと付き合ってくれへんか？」

と、大胆告白をする咲夜。

「お、お前本気で言ってるのか！？」

「何や、ウチやアカンか？」

「否、別にいけなくは無いけど・・・」

「せやったら良えやろ？」

ハヤタは頭を抱えた。

（いきなり交際望まれた！って、あれ？そう言えば前にも一度こんな事・・・）

刹那、ハヤタの脳裏に真新しい過去の記憶が過ぎる。

（去年！そうだ、あれは去年の修学旅行で京都へ行った時だ！あんな時は確か班を抜け出して一人で大阪へ行ったっけ。で、その大阪で地元の女の子と会って一緒に一杯遊んだな。名前何て言ってたかな・・・）

『ウチ、愛沢　咲夜や』

（そうそう、それぞれ！それでそいつ・・・）

『ウチ、自分の事好きやねん。せやから自分、ウチと付き合へんか？』

（ってな事言ってたな。めっちゃ可愛くて好みだったんだが、その日一日しか会えないから保留にしてたんだよな、確か。って、一寸待て？）

「あああああ！」

ハヤタは咲夜を指差して叫んだ。

「なっ、何や！？吃驚するやないか！」

「思い出した！俺、去年お前と会ってる！」

「何やて？」

「だから、俺とお前は1年前大阪で会ってるんだ！」

「ドアホー！自分、ウチの事思い出すんにどれだけ時間掛かってんねん！？」

咲夜はそう言ってハリセンを出し、思いつ切りハヤタを叩き付けた。

「痛！」

「痛！やない！こないな痛みより自分に忘れられつつたウチのがもっともつと痛いで！」

精神的な物だが。

「ま、待て！謝るから許せ！」

「別に怒ってへんや。せやから、そないな事言われても困るんやけど」

ハヤタは安堵の溜め息を吐いた。

「で、どうなんや？ウチと付き合ってくれるのか？」

ハヤタは自分の胸に手を当てた。

（やべえ、心臓がドキドキしてる。あん時と一緒にだ）

「あのさ、悪いんだけど、一寸待ってくれる？暫く考えさせてくれ嫌や！」

「何故？」

「ウチは今返事が欲しいねん」

「でも、俺どうしたら良いかまだ・・・」

ハヤタが迷っていると、咲夜がベッドに飛び乗り、ハヤタを押し倒して馬乗りした。

「いきなり何すんだよ？」

「ハヤタはん、もつと自分に素直に成らなアカンで？」

「俺は何時も素直だ」

「否、自分は迷つとる。自分、ホンマはウチの事好きなんやろ？せやったらそれで良えねん、ウチと付き合えば良えねん」

（どうなんだろうな？咲夜は可愛いし、俺の好みだ。けど、俺はま

だ咲夜が好きって決まった訳じゃねえし・・・」

「なんやったらウチが本気にさせてやつても良えで？」

咲夜はそう言っただけでハヤタの上に倒れた。

「どや、その気成ったか？」

（何だよこの女は！？大胆過ぎだろ！）

「何や、まだなんか」

（やべえ、目が反らせ無え。それに何なんだこの感じは。俺こいつに惚れてんのか？）

「咲夜」

「何や？」

「お前と付き合っただけよ」

「ホンマか？ホンマに良えんか？」

「ああ」

頷くハヤタ。

「わあ、おおきに！」

咲夜はそう言っただけでハヤタを抱き締めた。

「咲夜」

と、抱き締め返すハヤタ。

「なあ、ハヤタはん」

「ん？」

「もし浮気したら、ウチ許しまへんで」

「しねえから安心しろ」

「信じて良えか？」

「俺が嘔吐く様に見えるか？」

「解った、ウチ自分を信じる」

咲夜はそう言っただけで、目を瞑って寝てしまった。

（こいつ、寝ちまいやがった。つうか、俺も眠い）

ハヤタは大きな欠伸をして眠りに入った。

Story 03・頬にハヤタのキス、普通は逆だわな

翌朝、咲夜は目を覚ました。

目の前にはハヤタの寝顔がある。

（せや。ウチ、あのまま寝てもうたんや）

咲夜は起き上がるうと力を入れるが、体が動かなかった。

（は、ハヤタはん……。ウチは抱き枕やないで？）

咲夜は恐る恐るハヤタの頬をツンツンした、が、ハヤタは顔を引き攣らせるだけで起きない。

「なあ、ハヤタはん。起きてくれへん？」

「んん……。？」

ハヤタは薄目を開けた。

目の前には咲夜の顔。

「なつ、咲夜！何故お前が俺の上に！？」

「何言うてんねん自分？自分が昨日ウチを抱いて……。あれ？……。アカン、何も覚えとらんわ。そないな事より放してくれへん？」

「あ、悪い」

ハヤタは咲夜を解放した。

「そや自分、料理作れるか？今この屋敷、メイドはんがおらへんのや。せやからハヤタはんにお願いしよかと思つてんねんけど……。と、言つてゐる間にハヤタは消えていた。」

「つて、何処行つたんや！？」

咲夜の部屋を跡にしたハヤタ。彼は今、食堂で料理を並べていた。

「うむ、上出来だ」

ハヤタそう発して廊下に出た。

「咲夜ー！」

ハヤタは叫び、屋敷中に声を響かせた。

自室にいる咲夜は、慌ててハヤタの下に駆けた。

「何や、そない大声出して!？」

「飯が出来た」

「アホ、そないな事なら呼びに来れば良えやろ」

「いや、そうしようかと思っただけで、呼びに行くの面倒だったから・・・」

「ドアホー!そないなんで執事が勤まるかつちゅうねん!」

咲夜はそう言ってハリセンで攻撃して来た。

ミス、ハヤタにダメージは無い。

「なっ、ウチの突っ込みを避けるとは!？」

「残念だったな、当たらなくて。そんな事より、早く飯食わんと片付けるぞ」

「アカン、忘れとったわ」

咲夜はそう言っ食堂に入っ席に着き、食べ始めた。

「おっ、こら美味いで!ハルが作るんより美味^{びみ}や!」

「そうか、それは良かった。何しろ始めて作ったから」

「なっ、自分、料理始めてなんか!？」

「ああ」

「そか。それにしても美味いで。これならなんぼでも食えるっちう訳や」

「よ、よせや。お世辞なんか要らん」

「お世辞やないで。ホンマに言うとんのか」

「ほ、本当か?本当に美味いか？」

「ホンマ美味いで」

それを聞いたハヤタは、後ろから咲夜に抱き付いた。
ゲホツとむせる咲夜。

「自分、いきなり何すんねん!？」

「嬉しいな。咲夜が美味しいって言ってくれて」

ハヤタはそう言っテュツと言う擬音を立てて咲夜の頬に唇を付けた。

途端、咲夜の顔が真っ赤に染まって白煙を噴いた。

「どうした咲夜！？顔が真っ赤だぞ！熱でもあんのか？」

「し、心配せんでも大丈夫や」

その時、二人は背後に視線を感じた。

「誰や？」

と、咲夜は振り向いた。その先には、メイド服を着用した白皇学院生徒会書記の春風^{はるかぜ}。千桜が顔を真っ赤に染めて立っていた。

「はっ、ハルさん何時からおったんや！？」

「えっ、えっと、その・・・」

千桜はオドオドし始め、

「あの、咲夜さんの『ホンマ美味しいで』って所から・・・」

「要しはるに、ウチが抱き付かれてる所からやな？」

「そ、そうですね・・・」

重い空気が流れる。

「ひよっとして、春風さん？」

千桜ギクツとして焦った。

訊ねたのはハヤタだ。

「何や？二人とも知り合いなんか？」

その問いに千桜が頷き、「白皇の同級生だ」とハヤタが答える。

「え、えっと、それじゃあ私はお邪魔な様なので！」

千桜はそう言っ慌てて去って行った。

「何かウチ、朝飯食べる気失せてしもうたわ」

「駄目だ。朝食はちゃんと摂らんと体が保たねえぞ？」

「そないな事言つても、食欲失せたもんは仕方無いやないか」

「・・・じゃあ片付けるぞ」

「好きにせえ」

咲夜はそう言っ食堂を跡にした。

ハヤタは咲夜の食べ残しを片付ける為、さっさと胃に詰め込んで食器を洗う。

「朝食要らなく成ったな」

Story 04・二人は入れ替わる

その日の早朝、ハヤタは咲夜の部屋で目を覚ました。

（何で俺、咲夜の部屋で・・・？まあ良つか）

ハヤタは背中をグツと伸ばし、ベッドから出、部屋を出て洗面所へ向かった。

「あれ？」

普段は腰ぐらいの高さしか無い洗面器が、何故か今日は胸の前にある。どう言う事なのだろうか・・・疑問符。

ハヤタは辺りを見回し、台に為る物を探す。

（あつた！）

ハヤタは咲夜が顔を洗う時に台にして使う四角い木の枕を見付けた。そしてそれを洗面器の前に置いて乗っかり、蛇口を捻って水を出し、顔を洗った。

（今日の俺の体変だな）

と、濡れた顔をタオルで拭いて何気無く鏡を覗くハヤタ。

ハヤタ曰く、超可愛い咲夜の美顔が鏡に写っている。

「あ、起きたのか。咲夜」

ハヤタは振り向いたが、その先に咲夜の姿は無い。

「あれ？」

ハヤタは疑問符を浮かべながら再度鏡を覗き込む。

「そんなバカな！？」

と、ハヤタが驚いて感嘆符を浮かべると、鏡の中の咲夜が全く同じ様に驚き、感嘆符を浮かべる。

（待て！これはきつと見間違いつて奴だ！咲夜の事ばっか考えてっからこんなのを見るんだ！）

ハヤタ改め咲夜は目を瞑り、深呼吸をして目を開く。

「何で・・・？」

咲夜は疑問符を浮かべた。

（そう言えば声も・・・）

咲夜は発声してみた。

「あいうえお」

驚いて感嘆符を浮かべる咲夜。

「俺咲夜に成ってる!？」

咲夜は胸に手を置く。

（落ち着け俺！兎に角、今は落ち着いて咲夜を演じよう）

咲夜は目を瞑って深呼吸をし、そっと目を開けた。

目の前には、ハヤタが驚いた顔をして立っていた。

「何者や自分!？」

「何者って、ハヤタはんウチの事忘れてもったんか？ウチや、咲夜や」

咲夜はそう言ってハヤタを見つめる。

「何言うてんねん!？咲夜はウチや!」

ハヤタは懷に手をつまむ。

「あれ!？ウチのハリセン何処や!？」

（・・・この、目の前にいる俺、もしかして・・・）

「お前、ひよつとして咲夜か？」

咲夜はハヤタに真顔で訊ねた。

「そつや！何か文句あるんか!？」

そう言っつてハヤタは咲夜に襲い掛かる。

「落ち着け咲夜！俺だつ、ハヤタだ!」

その言葉にハヤタの拳が咲夜の眼前約1ミリで止まった。

「咲夜、鏡を見るんだ」

ハヤタは言われた通りに鏡を覗いた。

「なっ、何やねんこれは!？ウチ、ハヤタはんに成ってるで!？」

「どうやら、俺達は互いの心と体が入れ替わってしまったらしい」

「何やて!？」

「どうしてそうなったかは知らんがな」

ハヤタは俯いた。

「なあ、ハヤタはん？」

「うん？」

「や、やっぱ良えで。ほな、ウチ朝食作って来るで。せやからハヤタはんは席着いて待つとき」

「えっ・・・？」

（一寸待て！咲夜が朝食を作る！？それマズイよ！）

咲夜は洗面所を跡にしようとしているハヤタの腕を掴んで引き留めた。

「食事は俺が作るから、咲夜は休んでくれ」

「せやけど、今の自分、何処からどう見てもウチやで。ウチが料理作ってる所見られたら大変な事になるで」

そう言った刹那、咲夜の姿が消えた。

「ちよっ、ハヤタはん何処行ったんや！？」

Story 05・夏奈子、再来

台所では、咲夜が朝食を作っていた。

今朝の献立は白米、目玉焼き、レタス、ウインナー、味噌汁。

「朝食定番のメニューではないか」

と言うのは若本ヴォイスである。

その声に対して咲夜は、「えっ、そうなの？」と天井に顔を向けて言った。

「ハヤタはーん」

と、台所にハヤタが入って来る。

説明するまでも無いが、彼の中身は咲夜である。

「咲夜か。丁度良い所に来た。今朝食が出来た所だ」

咲夜はそう言って朝食を食堂に運んだ。

ハヤタが席に着く。

「なあ、ハヤタはん？」

「ん・・何だ？」

「ウチら、何時んなったら元に戻れるんやろか？」

「知るか。つつか俺らが戻れなくても困る事なんて別に無いだろ」

「困る事ならあるで？」

「ほほお。例えば？」

ハヤタは頬を赤らめた。

「・・れや・・ろとかや」

「あ？」

「せ、せやかからっ、トイレやお風呂とかや!」

「何だ、そんな事か」

「そないな事とは何や!? ウチは恥ずかしゅうて先刻からトイレ我慢してんのや!」

「あっ、俺も行って無え!」

我慢に限界を感じたのか、咲夜は慌ててトイレまで駆け、用を済

ませて食堂に戻った。

「ハヤタはん、ウチの見たな？」

ハヤタは席を立ち、咲夜を張つ倒して馬乗りした。

「な、何だよいきなり？つうかまだ心の準備が！」

と、その時だった。

メイドの春風 千桜が現れ、「朝月くん、朝っぱらから何咲夜さんの事襲つてんですか？」と訊ねた。

「は、春風さん何時からそこに！？」

ハヤタはそう言いながら、感嘆符と疑問符を浮かべた。

「今来た所です。それより朝月くん、早く退かないと咲夜さんが可哀想ですよ」

ハヤタは咲夜をチラツと見た。

「（俺の印象が悪く為るから早く退け）」

咲夜は小声で言つて睨んだ。

（何やってんねんウチは！？）

ハヤタは慌てて咲夜の上から退く。

「男として目覚めた咲夜だった・・・」

ハヤタは疑問符を浮かべ、「今の誰や？」と首を傾げた。

「ただの傍観者である」

と、若本ヴォイスが聞こえた。大方、先刻のもそれだろう。

「あの、誰と話してるんです？朝月くん」

ハヤタは目を点にした。

（えっ、ハルさんには聞こえてへんのか？）

「自分の頭を疑う、咲夜である」

ハヤタはその声が聞こえた方に向かって「やかま喧しいわ！」と鋭く睨み付けた。

「て言うか朝月くん、何故に関西弁？」

ギクツ！ ハヤタは硬直した。

すると咲夜が起き上がってハヤタのフォローを始めた。

「何やハルさん、知らんのか？ハヤタはんは昔、大阪に住んどった

んや。大阪弁喋れても可笑しくあらへんで」

と言うのは事実で、ハヤタは昔、幼稚園の頃だが、大阪に住んでいた。当時の家は、愛沢家の隣だったと言う。

「成る程、そうでしたか。てつきり、二人の体が入れ替わったのかと思いましたよ」

グサツ！ 咲夜の心を槍が貫く。

「どうかしたんですか？」

（バレてんじゃねえか・・・！）

「ハヤタはん、こいつハルさんやないで！」

そう言ったのはハヤタだった。

「ハルさんはこないな事言う人じゃあらへん！自分、一体何者や！？」

「クツクツクツ、バレては仕方あるまい」

千桜はそう言って、顎に爪を引つ掛け、千桜マスクを外した。

咲夜とハヤタは驚いて感嘆符を浮かべた。

千桜マスクの下から出てきたのは、ヒナギク・・・否、鮫島 夏奈子だった。

鮫島 夏奈子。彼女は前作で鎌鼬が憑依したナギに軽く捻伏せられた雑魚である。

「桂はん！？」

咲夜は首を横に振った。

「違う・・・」

そう言いながら後退る咲夜。

「どないしたん？」

ハヤタが訊ねた。

「うわああああ！」

咲夜は頭を抱えて叫び、瞳が操られた人の如く真っ黒に染まる。

「どうやら実験は成功の様ね」

「実験？」

ハヤタは疑問符を浮かべる。

「世界中の人間と人間の心と体を入れ替える実験よ」

「なっ、やからウチとハヤタはんが入れ替わってもうたんか。せやけど何でそないな事したんや？めっさ迷惑なんやけど」

「桂 ヒナギクの体を手に入れる為よ」

刹那、咲夜の脳裏をヒナギクの笑顔と『ハヤタくん』と言うその声が通り、彼女は瞳の色を取り戻した。

（ヒナギク！？）

咲夜は首をブンブン振った。

（否、アイツとは別れたんだ！けど、この気持は一体・・・？）

「まあ、安心して頂戴。あなた達の事はちゃんと元に戻してあげるわ。桂 ヒナギクと入れ替わってから」

「目的は何だ！？あいつと入れ替わるからには何か理由があるんだろ！？」

咲夜は無意識に叫んだ。

夏奈子が咲夜を睨む。

「何か？」

「い、否、何でも無いです」

（やっぱり怖い・・・）

咲夜は恐怖で体が震えた。

（でも、このまま何も為なければヒナギクを奪われる）

咲夜は台所に素早く駆け、ナイフを手にして夏奈子に襲い掛かった。

夏奈子は左腕を盾にした。

カン！ ナイフが弾き飛ばされた。

驚いて感嘆符を浮かべる咲夜。

「んなアホな！？ナイフ素手で受け留めよったで！有り得へんやろ！？」

そのハヤタの発言に、夏奈子は説明する。

「実は私、ロボットなのよ」

そう言って夏奈子は懷からメスを取り出し、腕をスパッと裂いた。

切れ目から真つ赤な液体が滲み出てくると、夏奈子はそこに爪を引つ掛けて手袋を脱ぐ様な感じに引つ張った。

肉が剥がれ、金属の棒が露に成った。

「て言うかハヤタ、シモベの分際で私に楯突くなんて100年早いわ」

夏奈子はそう言つて咲夜の鳩尾を殴り付けた。

「がはっ！」

咲夜は吐血して床に倒れ込んだ。

夏奈子がハヤタの方を向き、歩み寄ろうとすると、ガシツと咲夜が足を掴んだ。

「どうでも良いが俺らを元に戻さねえか？」

「おっと、そうだったな」

夏奈子は徐に何かを取り出した。

それは二つの錠剤だった。

「これであんた達を入れ替えたのよ」

そう言つて錠剤を二人に渡す夏奈子。

「飲みなさい」

咲夜は飲み込んだ。

ハヤタは警戒しながら飲み込む・・・。

その瞬間、目眩が起きて二人の意識が入れ替わった。

「おっ、元に戻ったで！」

と、咲夜が大喜びで飛び跳ねた。否、実際には飛び跳ねてはいないが。

「昨夜のご飯に入れたな？つうか春風さんはどうした？」

夏奈子はニヤリと笑った。

「なっ、まさか！？」

「安心し給え。春風と言う女は無事だ」

「それなら良い。さて、ヒナギクの件に変わろう。あんたはヒナギクと入れ替わるとか言つ訳だが？」

「その通りよ」

「理由は？」

ハヤタはそう言つて、右手を顔の前で竜の手に変化させた。

「何だその醜い手は？」

「なっ、醜いとは何だ醜いとは！？」

「醜いから醜いのよ！」

夏奈子はそう言つた後ハヤタを殴つて怯ませてから「昇竜拳！」と回転アッパーを放つた。

「うわっ！」

宙に舞うハヤタ。

「ねえハヤタ、桂 ヒナギクの居場所知ってる？自宅へ行つても五月蠅い姉がいるだけで会えなかったのよね」

ハヤタは床に背中を着いて跳ね上がり、腹這いに成つて止まつた。
「知つてどうする？」

「行つて捕まえるのよ。乗っ取る為だね」

「乗っ取る？」

「ええ、こうやって」

夏奈子はそう言つて、咲夜の背後に光速で移動した。

驚いて振り向く咲夜。

夏奈子は体内から銀色の液体を出し、咲夜にぶつ掛けた。

銀色の液体が咲夜の体内に徐々に浸透して行く。

「体が動かへん！何なんや！？」

ドタツ！ 夏奈子は気を失つて倒れた。

「お前、人間に自由に乗り移れるアンドロイドだな？」

「御名答」

と、咲夜が笑む。

「薬関係無えじゃん！」

ハヤタは突つ込み、咲夜に殴り掛かったが、既の所で止まつた。

原因は咲夜の「私を殴つたらこの小さくて可愛い体^{ボディ}に傷が付くぞ？」と言つ言葉だ。

それだけは絶対に出来ないハヤタ。だから寸止めをしたのだった。

「バーカ」

咲夜はそう言って手前で止まったハヤタの腕を掴み、背負い投げをした。

ダン！　ハヤタは背中を床に叩き付けられた。

「お前、知ってる顔だからって理由で攻撃を躊躇うタイプだな。死ぬぞ？」

「悪かったな」

「お前らしくて良いがな。それより桂　ヒナギクの居場所を教えて貰おうか」

「その前に貴様の正体を見せろ」

「良いだろう」

咲夜がそう言うと、体内から銀の液体がまるで脱皮するかの如く出てきて、彼女の後ろで金属のロボットに構成された。

ハヤタは蹠跟めきながら立ち上がって「そいつが貴様の正体か？」と訊ねた、御名答。

「さあ、桂　ヒナギクの居場所を言って貰うぞ」

「そいつは言えねえな」

「そうか、残念だ。教えればシモベから彼氏に昇格してやったのに、誰がシモベだ！？つか女は間に合ってるわ！」

ハヤタは金属生命体に殴り掛かる、が、それが液化してしまい、物理攻撃が効かない。

「私に攻撃は効かんぞ。それとも、桂　ヒナギクの代わりに貴様を乗っ取れと？」

「その質問に答える前に俺の質問に答えて貰おうか。何故お前はヒナギクを乗っ取ろうとする？」

「何故？全宇宙で誰よりも強いからだ」

「違うな・・・」

「何？」

「全宇宙で誰よりも強いのは俺だ」

「ほお、ならば貴様を乗っ取ってやろうか？」

「却下だ」

ハヤタはそう言っ腕を金属生命体から抜いて飛び退いた。

「来い、かまいたち！」

その声に反応し、何処からとも無く真剣に変化した妖刀かまいたちが飛来し、ハヤタの手に収まった。

「最初に言っておく！俺はっ、かーなーり、怒ってる！」

「貴様が怒った所で怖くも何とも無いが？」

金属生命体はそう言いながら、辺りを見回して何かを探した。

「そう言えば貴様は何かと融合しなきゃ力を発揮できない雑魚だったな」

その発言に金属生命体は額に怒りマークを出現させた。

「う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！」

そう言ってまた何かを探し始める金属生命体。

「表に車が路上駐車されてるぜ」

その言葉を聞いた金属生命体は颯爽と外へ出て行った。

「そしてハヤタはそれを追うのだった。と言う訳で、次回はハヤタVS・トラ スフォーマーをお送りする」

と、若本ヴォイスが聞こえた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

Story 06・Vストラ フォーマー、その後咲夜がキレル

愛沢家敷地周辺。謎の金属生命体はハヤタの眼前で路肩に停めてあるGT-APEX AE86TURENO と融合した。

「トランスフォーム」

その言葉と共に、86がロボットに変形した。

その大きさは、二階建ての家を優に超している。

「でっけえなあ。だが相手にとって不足は無え！」

ハヤタはそう言っつかまいたちを禍殿鎌鼬に変化させた。

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ！」

と、金属生命体に接近し、斬り掛かるハヤタ。

金属同士がぶつかり合い、キンツと音を立てる。

「そんな玩具如きで私が斬れるとでも思ってるのか？」

「どんだけ頑丈なんだデメエは？」

と、ハヤタは一旦退いて斬撃波を飛ばした。

だが、金属生命体は対してダメージを受けず、軽く蹠踉そつろうするだけ

だった。

「全然、痛くも痒くも無いんですけど？」

金属生命体はそう言ってハヤタを見下ろした。ロボットなので表

情迄は解らない。

「どうでも良いがお前に一つ訊きてえ」

何？ と、金属生命体が疑問符を浮かべる。

「夏奈子には何時から入ってたんだ？」

「潮見に転入した時には既に入ってたわ。あんたに近付く為にね」

「俺に？ 一体何が目的で？」

「あんたを従わせてこの星をあんたと一緒に征服するのが目的。あんたがいれば地球人なんてあつと言う間」

「折角の誘い有り難いが、生憎俺は今の地球が好きなんでね。変えるつもりは毛頭無い！」

ハヤタはそう言つて真空斬りを放った。

だが金属生命体は微動だにしない。

（傷一つ負わねえ！俺こいつに勝てるのか！？）

ハヤタが戦略を練っていると、金属生命体が彼を薙払つて来た。

（しまった！）

ハヤタは慌てて鎌鼬でガードするが、受け止め切れずに吹っ飛んで宙に舞った。

「残念だよ。あんたみたいなのが私の手下に成ってくれなくて」

金属生命体はそう言つて宙に舞うハヤタを手を組んで叩き、地面に叩き付けた。

「うつ！」

背中を打ち付けたハヤタの顔が引き攣る。

「踏み潰してあげるわ」

金属生命体はそう言つてハヤタを踏み潰した。

地面に足が着き、砂埃が舞う。

「ふっ、死んだみたいだな」

その時、金属生命体の足が持ち上がった。

「悪いなあ。咲夜残して死ぬ訳にはいかねえんだ」

ハヤタはそう言つて金属生命体を上空に放り投げ、センコウクウラに変身して飛び上がった。

「先ず一撃目！鮫島 夏奈子の分！」

と、金属生命体を地面に叩き付けるセンコウクウラ。

「次は咲夜の分！」

センコウクウラは急降下為て金属生命体に激突した。

「ぐわっ！」

クリティカルヒット。金属生命体の腹に風穴が開き、大ダメージを負う。

「そしてっ、俺の分だあ！」

センコウクウラは上空へ飛び上がり、巨大な火の玉を吐き出した。金属生命体は86から分離し、飛び上がって火の玉を避けてセン

コウクウラの口に飛び込んだ、が、センコウクウラの火炎放射に因り金属生命体は外へ飛び出した。

「往生際が悪いな。お前では俺には勝てない事ぐらい・・・!？」

その時、センコウクウラは金縛りに襲われ、地面に落下した。

「貴様、何をした!？」

「何をしたか？教えてあげる。あんたの口に入った時に私の体の一部をあんたの体内に入れさせて貰ったわ。これであんたは私の思うがまま」

「そうか」

センコウクウラはニヤリと笑みを浮かべ、唾と共に銀色の何かを吐いた。

「貴様の一部ってのはこれか？」

「ど、どうして・・・!？」

「貴様如きでは俺を操る事も乗っ取る事も出来ないって事だ!」

「ならこれでどうかしら？桃太郎印のキビダンゴ!」

それっ！ と、金属生命体は団子を取り出してセンコウクウラの口目掛けて投げた。

刹那、センコウクウラがハヤタの姿に戻り、目を団子にして口にくわえ、咀嚼して飲み込んだ。

金属生命体が「食ったわね」と北叟笑んだ。

疑問符を浮かべるハヤタ。

「朝月 隼太。桂 ヒナギクを連れて来なさい」

金属生命体は言うが、「嫌だね!」とハヤタは断った。

そんなバカな!？ と、金属生命体は団子の期限を見た。

「ちよっ、何コレ!？期限切れてるじゃないのよ!」

この団子は相手に食べさせると永久にシモベとして操る事が出来るが期限が切れると効力を失うのだ。

ハヤタは光速を遥かに上回る速度で金属生命体の前に着き、「残念だったな」と言つて刃を突き刺した。

グサッ！ 禍殿鎌鼬が金属生命体の胸を貫く。

金属生命体は悲鳴を上げ、溶けて液体に成った。

ハヤタは禍殿鎌鼬を木刀に戻し、上空へ放り投げた。そして、屋敷内に戻った。

中では未だに夏奈子が眠っていた。

ハヤタは徐に近付き、夏奈子を起こす。

「こ、此処は・・・？」

と言うのは目を開けた夏奈子の第一声。

「鮫島 夏奈子さん？」

夏奈子は疑問符を浮かべた。

「あなたは？」

「朝月 隼太です」

「そう。あなたが助けてくれたの？」

その問いにハヤタは微笑んで頷いた。

夏奈子は素早く起き上がり、「有り難う御座います！」とハヤタの首に腕を巻き、大胆にも顔を近付けてチュツと音を立てて接吻をした。

顔を真っ赤に染め上げるハヤタ。

「か、勘違いしないでよ？助けてくれたお礼なんだから」

「お礼だとしても普通はしないわな」

と言うのは若本ヴォイスだ。

「う、五月蠅いわね！アメリカでは挨拶代わりに接吻するのよ！？」

「此処は日本だから」

「・・・・・・」

沈黙する夏奈子。

「ハヤタはん」

と、咲夜が彼の肩を数回、軽く叩いた。

「何だ？」

と、振り向くと咲夜がハリセンで顔面を引っ叩いた。

バシン！ と凄いな音が部屋中に響いた。

「いってえ！何為んだよ！？」

「自分、誰と付き合ってるか解つとんのか！？ウチとやで！？ウチ！なけどウチとは一度もキスせず^ずに他の子とキスカ！この女つたらし！」

今迄に無く怒り狂う咲夜をハヤタは宥め様とするが、「もう二度と面見せん^{せん}というて！」と言って去って行った。

「さ、咲夜？」

ハヤタは目を点にした。

「と言う訳で、次回は咲夜が事件に巻き込まれます」と、若本ヴォイス。

S t o r y 0 6 ・ V S ト ラ

フオーマー、その後咲夜がキレる（後書き）

桃太郎印のきびだんごはドラえもんの秘密道具だが小学館的に問題は無いので悪しからず。

Story 07・夏奈子の相談事と拉致られる咲夜

咲夜は少し怒っていた。理由はハヤタが夏奈子と接吻をしたからである。とは言っても、夏奈子の方が一方的にただけであるが・・。

「はあ・・・」

咲夜は溜め息を吐いた。

（ウチ、ハヤタはんに悪い事してしもうたな。怒ってへんやるか？）
はあ・・・ と、再び溜め息。

（こうしててもしやあない。ハヤタはんに謝りに行こう）

咲夜はベッドから降り、部屋を出て食堂に足を運んだ。

しかし、ハヤタは居ない。ついでに言うとうと夏奈子も居なかった。

二人で何処か行ってしまったのだろうか？

咲夜はそんな事を考えたが、直ぐに首を振って思考を掻き消した。
（ハヤタはんに限ってそないな事ある訳無いやないか）

咲夜はそう思い、食堂を跡にしようとするとうと、メイドの春風 千桜と鉢合わせした。

「あ、ハルさん」

「咲夜さん」

「せやハルさん、ハヤタはんが何処に居るか知らんか？」

「朝月くんですか？彼なら先程、私の学校の生徒会長さんと喫茶店で一緒にいるのを見掛けましたが、何だか良いムードでしたので声も掛けずそのまま放っておきました」

「何やて！？ハルさん、その喫茶店は何処や！？」

「え、確か毛李探偵事務所の下にあるマールだった様な・・・つて、一寸咲夜さん！？」

咲夜は千桜のマールと言う所で、既に食堂から立ち去っていた。同じ頃、都内の何処かにある毛李探偵事務所の下にある喫茶店マールでは、夏奈子がハヤタに相談を持ち掛けていた。

「え、生き別れに成った妹を捜してる？」

ハヤタの言葉に夏奈子は頷いた。

「詳しく聞かせてくれないかな？」

その問いに夏奈子は再度頷き、妹の事を詳しく話し始めた。

夏奈子の話では、12年前、自分が4歳の時に両親に捨てられ、鯨島の義父母に拾われ、養子に成ったと言う。

捨てられる直前、自分そっくりの女の子、恐らく妹らしき人物が、『お姉ちゃん』と連呼しているのを覚えている。その為、彼女は自分に妹がいるのでは無いかと考え、ずっと捜していると言うのだ。

「成る程ね」

ハヤタはそう言つて暫し考え込む。

（鯨島さんの双子の妹。心当たりが無い訳じゃ無いんだけど・・・まさかね）

と、ヒナギクの笑顔を浮かべるハヤタ。

（否、違う！）

ハヤタは首を数回横に振るってヒナギクの幻影を掻き消した。

だが、何度も現れるので手に負えない。

「どうかしたの？」

夏奈子は訊ねた。

「あ、否、一寸考え事を・・・。それより妹の件、調べても良いよ」

「えっ、ホントに!？」

ハヤタは頷いた。

「でもさ、何で上行かないの？」

上と言うのは毛李探偵事務所の事である。

「それはあなたと一緒に・・・」

ハヤタは疑問符を浮かべた。

「否、何でも無いわ。気にしないで」

夏奈子はそう言つてニコツと微笑んだ。

ハヤタはその笑顔に胸がキュンとしてドキドキした。

（か、可愛い。ヒナギクの笑顔を見てるみたいだ。・・・って、俺

は何を考えてるんだ！？俺には咲夜がいるでは無いか)

一方、咲夜は、途中にある負け犬公園である光景を目の当たりにしていた。

それは、黒い人が女性を刺し殺した瞬間だった。

咲夜は腰を抜かし、悲鳴を上げた。

黒い人は咲夜に気付き、辺りに気を配りながら咲夜の下にやって来た。

「咲夜危うし！と言う訳で今回は、夏奈子の妹捜しを御送りする」と言うのは若本ヴォイスである。

「誰だ！？」

黒い人は辺りを見回しながら言った。

「傍観者である」

「はあ！？強姦者！？何だか知らんが出て来い！」

「傍観者です。後で覚えておいて下さい」

その言葉に黒い人は恐怖を覚えた。

Story 08・ハヤタの分裂

ハヤタは町中で聞き込みをしていた。しかし、夏奈子の妹情報は未だ掴めずである。

「ねえ、いい加減諦めて、あそこに頼りましようよ」

夏奈子はそう言つて毛李探偵事務所のイメージを頭上に浮かべたが、しかしそれをハヤタが掻き消しながら答える。

「駄目だあそこは！前に一度使ったが全然役に立たない！高い金だけ取つて後は適当。事件の捜査なんてコソンの毛さん並だよ」

「そ、そうなんだ」

「だから俺たちが自力で」

そう言い掛けた時、ハヤタの背が少しばかり縮んだ。

「あれ、僕は一体？」

「あ、朝月くん！？どうしたのよ一体！？」

その言葉にハヤタは夏奈子の方を振り向いた。

「うわっ！か、夏奈子さん！ば、僕に何か用ですか？」と体をブルブル震わせて脅える。

「皆は覚えているであろうか。何を隠そう、朝月隼太。彼は二重人格であり、主人格と入れ替わると裏人格の記憶が失われるのだ」と言うのは若本ヴォイスである。

「ちよ、どうしたのよ！？」

そう言つてハヤタに近付く夏奈子。

「こ、来ないでよ……。うわぁーん！」

ハヤタは泣きながら去つてしまった。

「待つて朝月くん！」

しかし、彼にはもう届かなかった。

夏奈子の魔の手から逃げのびたハヤタは、負け犬公園のベンチに

座っていた。

（僕、今まで何してたんだろう？うーん、思い出せないなあ。そう言えば夏奈子さんが居たけど、もしかして僕、今まで操られてたのかな？）

「よっ、お前こんな所で何してるんだ？」

とそこに現れたのは、13歳で白皇の高等部に入ったナギだ。

「えっと、君は？」

「なっ、お前この私を忘れたと言うのか！？」

「ごめん、覚えてない」

「三千院 ナギだ。思い出したか？」

ハヤタは首を横に振った。

がつくしと頂垂れるナギ。

「うっ・・・！」

ハヤタは呻き、頭を抱えた。

「おい、大丈夫か！？」

と言うナギの心配をよそに、ついにハヤタは意識を失った。

ナギは慌てて彼を背負い、自宅の自分の部屋にあるベッドへと運んだ。

「う・・・うん？」

意識を取り戻したハヤタが目を開けた。

「目が覚めたか」

「此処は・・・？」

「私の家だ」

「そう・・・。あの、僕は今まで何をしてたのでしょうか？先刻の公園の近くで出会ったマリアさんと交際するって決まった所までは覚えてるんだけど・・・」

「相当酷いな、お前の記憶喪失」

「き、記憶喪失？僕がですか？」

「ああ、そうだ。それと一つ教えとくが、今お前はマリアとは付き合っていない。別の奴、ヒナギクと付き合っているのだ」

「ヒナギクさんを知ってるんですか？」

「知ってるも何も同じ学校だ。それよりお前こそ何故ヒナギクの事を知っているのだ？」

「それは僕と彼女が剣道界で1、2を争う仲だから」

「そうなのか？」

「うん。それよりヒナギクさんは？彼女が僕の恋人なら、早く逢って話しがしたい。もしかすると僕の事何か聞けるかも知れないし」

「否、それは無理だよ。あいつは、お前が居なくなっただ後、お前を捜して旅に出てしまった。今頃、宇宙空間にでも居るんじゃないか？」

とナギが喋っている頃、ヒナギクは地球から何万光年と離れた宇宙の何処かを彷徨っていた。

因みに宇宙服が無くても平気なのは、竜神のお陰である。

「僕が居なくなっただって、どう言う事？」

「お前が怒って振ったんだよ、ヒナギクを。で、あいつはお前に謝る為、お前を捜しに行ったんだ」

「そ、そうなのか。悪い事したな」

とその時、激しい頭痛がハヤタを襲った。

頭を押さえるハヤタ。

「お前、大丈夫か！？」

「うっ・・・！」

呻くハヤタ。背中に穴が開き、中からもう一人のハヤタが出てきた。

「うおー！」

驚き、ワクワクするナギ。

もう一人のハヤタは、背中から完全に抜け出した。

「主人格の奴目。俺を抑えやがって」

Story 08・ハヤタの分裂（後書き）

二つの人格が分離、と言う凄惨な展開になりました。この後、一体どうなる！？

Story 09・Gilles 581のヒナギク（前書き）

今回は地球を離れて遠い異星の話しよう。

Story 09・Gilses 581のヒナギク

地球から20・5光年離れた場所に位置する地球と環境が似た惑星。Gilses 581と言う赤色矮星わいせいの周りを13日の周期で公転している。

その惑星には大気があり、水があり、生命が存在する。

ヒナギクはそこで、その住人達に混ざって働かされていた。

「全く、何で私がこんな所で働かなきゃいけないのよ」

「ソコ、テガトマツテイルゾ！」

（何か言ってるし）

どうやら地球の言葉では無いらしい。

どぐしっ！

ヒナギクが重労働に疲れてボーっとしていると、ケツを思いつ切り蹴られた。

「痛いわね！いきなり何すんのよ！？」

ヒナギクは怒るが、相手には通じていない。

「サボラズニハタラケ」

そう言つと相手は去って行った。

（言葉が通じないのが余計腹立つ！あー、屹度ハヤタくんなら通訳出来るんだろぅなあ・・・）

「はぁ・・・」

ヒナギクは溜め息を吐くと、作業を始めた。

作業と言つても、宇宙船から降ろされた荷物をターミナルビルに運ぶだけ。とても簡単な作業だ。しかし、この惑星は重力が地球の5倍も有る為、地球に居る時より荷物がとても重く感じられるのだ。

「はぁ・・・これでお終い、と」

ヒナギクは持っていた荷物をベルトコンベアに載せて額の汗を手の甲で拭った。

「お疲れ。あんた、あまり見掛けない顔だけど、外の星から来たの

？」

解る人が居た。

ヒナギクは驚いて振り向く。

その先には、黒の長髪につり目が似合う可愛い少女の姿が在った。

「あの、言葉解るんですか？」

問いながらヒナギクは少女を改めた。

お尻には細長くて可愛らしい尻尾が在った。

「否、解らないわ」

「でも、ちゃんと通じてるじゃない」

「それは翻訳あんパンのお陰よ」

言って少女は懷からあんパンを取り出した。

「翻訳あんパンってドラえもんですか？」

いつもの若本ヴォイス。

「今の何よ！？」

驚いた少女は上を向いた。

「どうかしたの？」

ヒナギクが不思議そうな顔で訊く。

「うっん、何でも無い」

少女はヒナギクの方を向いて答えた。

「????」

「それより、私の質問に答えてくれる？」

「質問？」

「外の星から来たのか、と言う質問よ」

「うん、そうよ。地球って所から来たの」

「ふっん。何しに？」

「一寸人を捜しに」

「誰を？」

「言っても屹度解らないわよ。まあ、一応この人なんだけど」

言ってヒナギクはハヤタが写った写真を取り出した。

少女は写真に写っている人物を見て顔を顰めた。

「あんた、この方とどう言う関係？」

「知ってるの!？」

「私の質問に答えて」

「えっと、その・・・」

付き合ってた、とは言葉に出来ないヒナギクだった。

「まあ良いわ。あんたがこの方とどう言う関係かなんて私には関係無いし」

ヒナギクは「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

「この方を私が知ってるかどうか知りたいのよね。勿論知ってるわ。此処じゃ何だし、家に来てくれる? 詳しく話してあげる」

言って少女はヒナギクを自宅に案内した。

煙突の付いた半円の白い建物。それが少女の住むお家だ。

「とても小さい家ね」

「貧しいのよ。仕事してもらく金はいらないし。入って」

少女はドアを開けてヒナギクに入るよう促した。

ヒナギクは堂々と家の中に入り、靴を脱いで上がり込む。

「そこに椅子が有るから座って待って。今、お茶入れる」

ヒナギクは辺りを見回し、椅子を見付けるとそこに腰掛けた。

目の前には大きな木のテーブルが一個在る。

それから暫くして、少女が茶菓子を持ってきた。

「どうぞ」

お茶をヒナギクの前に置き、向かい側に座る。

「あれは五年くらい前だったかしら」

何の前触れも無くいきなり始まる少女の昔話。

ヒナギクは戸惑う事無く耳を傾けた。

「この星にね、小型の宇宙船が墜落したのよ。で、その宇宙船に乗ってたのが、写真の方なの」

(やっぱりハヤタくんって宇宙人だったんだ)

「あの、一つ訊くけど、彼は何でこの星にやって来たの?」

「追っ手から逃げて来たって言ってたわね」

「追っ手？」

「そう言えば、あんたその追っ手にそっくりね」
夏奈子だった。

ドンドンドン！

ドアを叩く音がした。

「誰か来たみたいね」

「地上げ屋よ」

「地上げ屋？」

「あいつら、毎日来るのよ。土地を売ってくれって」

「追い返してきてあげようか？」

「え、無理よ。居る事がバレ・・・って、出てっちゃ駄目！」

だがもう遅い。ヒナギクは玄関に移動してドアを思いつ切り開け放っていた。

「五月蠅いわね。何の用よ？」

言った所で通じる訳が無い。地上げ屋は頭に疑問符を浮かべた。

ヒナギクは俯いて額に手を当てる。

「あんパン食べる？」

少女がヒナギクの下にあんパンを持ってきた。

「要らないわよ！それより通訳して頂戴」

「だからあんパン持ってきたのに。このあんパンはね、通訳あんパンと言って、食べると言葉を通訳してくれるの」

ヒナギクはあんパンを奪い取ると、丸ごと口に詰め込んでゴクンと飲み込んだ。

「あ、ゴメン、間違えた。それ普通のおんパンだった」
ズザー！

ヒナギクは滑った。

「どんだけ天然なのよあんた！？」

「ゴメンゴメン、今度は本物」

少女は言って懐からあんパンを取り出した。

「通訳あんパン」

タララーン

「意味無くドラえもんやらなくて良いから」

言ってヒナギクはあんパンを取って口に詰め込んでゴクンと飲み込んだ。

「待たせたわね」

と地上げ屋の方に向き直る。

「あんた達、今すぐ帰らないと痛い目を見る事になるわよ」

「退け、お前に用は無い！」

地上げ屋はヒナギクを横に退かして中へ入って行った。

「おい、お前。此処にサインしろ」

「一寸待ちなさいよ！」

「ああ？」

地上げ屋の連中は振り向いてヒナギクを睨む。

「今すぐ出て行かないと後悔する事になるわよ！」

言ってヒナギクは格好良く木刀・正宗を取り出して前に突き出した。

「お前、アホな子だろ。そんなオモチヤで銃に勝てると思ってるのか？」

地上げ屋は懷から銃を取り出してヒナギクに向けた。

刹那、ヒナギクは目にも留まらぬ速度で地上げ屋の連中を一人、また一人と倒した。

「な、何だよ？今の・・・」

残りの地上げ屋がヒナギクに顔を向ける。

「残っているのはあんた一人だけど、どうする？」

地上げ屋は逆上してパンツと銃をヒナギクに向かって発砲した。
カン！

ヒナギクが正宗で銃弾を弾く。

「この野郎！」

地上げ屋がパンパンツと銃を連射した。

ヒナギクは数発の弾丸を全て弾いた。

地上げ屋は何が起こったのか解らなかった。

「な、何で当たらないんだよ？」

「銃如きで私を倒せると思わない事ね」

その言葉と共に、正宗が地上げ屋の頭を叩いた。

「うつ！」

地上げ屋は呻き声を上げて気絶した。

ヒナギクは正宗を仕舞い、グース力軒を掻いて眠っている地上げ屋共を家から追い出してドアを閉めた。

「あんた、一体何者なの？」

少女はそう訊いた。

「ただの地球人よ」

「地球人って強いのか？」

「私が強いだけよ」

「ふうん。兎に角、有り難う」

「これであいつらも懲りたでしょ」

「懲りれば良いけどね」

「え、諦め悪い奴らなの！？」

Story 10・ハヤタとナギ（前書き）

今回はネタがてんこ盛りっす。頭を空っぽにしないとまともに読めないかも。

Story 10・ハヤタとナギ

此処は三千院家のお屋敷のナギの部屋。

そこに居るのは、ナギとダブルハヤタ。

「で、見事に分離した訳だが、これは一体どう言う事なのだ？」

「俺にも解らない。そもそも、俺と此奴が一つになってたって事自体が不思議なんだ」

そう会話する二人の傍らで表ハヤタは二人を不思議そうに見る。

「意味が解らないが、お前は何者なんだ？」

「俺は遠い宇宙にあるセイバートロン星と言う惑星から逃げて来た逃亡者だ」

「何、お前は宇宙人だったのか！それで、何で逃げて来たのだ？」

「星の侵略にミスって捕まって牢獄にぶち込まれたから脱獄して逃げて来た。お前、夏奈子の事は覚えてるよな？あいつ、セイバートロン星から送り込まれた刺客だったんだ。ま、今は違うがな」

「そうなのか。つか、セイバートロン星って聞いた事あるな。確か、ついこの前3DCGアニメで話題になった超生命体

オーマービー　ウォーズに出て来るロボット達の故郷の惑星の名前だったか。しかし、それが本当だとすると、夏奈子の妹はこの星に居ない事になるんじゃないのか？」

「あっ！？」

ナギの一言で真っ青になる裏ハヤタ。

（待てよ待てよ待てよ。確か、あいつと出遭ったのはGillses 581C。まさか、あの惑星の住人だったのか！？）

興奮した裏ハヤタはナギの部屋を飛び出した。

「おい、そんな慌てて何処へ行くんだ！？」

「主の家に戻る！あの人なら宇宙船持つてるだろうからな！」

言って裏ハヤタは廊下を駆け出す。

「よう、久しぶりじゃねえか」

懐かしのホワイトタイガーが声を掛けて来た。

裏ハヤタは急停止して返答する。

「オタマ、生きてたのか」

「俺はタマだ！」

「どっちでも良いじゃねえか」

「よくねえよ！つーかお前、そんな慌てて何処へ行こうってんだ？」

「昨夜ん所。じゃあな」

そう言っただけでまた走り出す裏ハヤタ。

屋敷を飛び出し、門を抜け、夏奈子を捜しつつ愛沢家へ向かう。

「夏奈子！」

商店街で夏奈子を発見した裏ハヤタは近付いて声を掛けた。

「朝月くん、何処行つてたのよ！？」

「悪い、一寸野暮用が。それより解つたぞ！」

「何が？」

「お前の妹の居場所。G i l s e s 5 8 1 Cだ」

「えっ・・・？」

夏奈子は一瞬、頭が真っ白になった。

「一寸待つてよ。今私たちが居るこの星がG i l s e s 5 8 1

Cじゃないの？」

「違う。此処は太陽系にある第三惑星地球。G i l s e s 5 8 1

Cじゃない。そこからは20・5光年も離れてるんだ」

「嘘でしょ？」

「嘘なもんか。これから宇宙へ行こうと思う。来い」

裏ハヤタは夏奈子を抱き抱えて愛沢家へと急いだ。

「昨夜、宇宙船あるか！？」

と昨夜の部屋に飛び込む裏ハヤタ。しかし部屋は蛻の殻だった。

「昨夜さんなら出掛けましたよ」

そう言ってきたのは、メイドの春風 千桜だった。

「何処に行つたんだ！？」

「少し散歩して来ると行つてましたが、何処に行つたまでかは・・・

。そう言えばもう、丸一日経ってますね」

その時、裏ハヤタの脳裏に昨夜からのSOSメッセジが。

「助けて、ハヤタはーん！」

「昨夜！」

裏ハヤタは額に人差し指と中指の二本を当て、昨夜の気を探った。

「見付けた！」

「シュイン！」

その音と共に、裏ハヤタは夏奈子を抱いたままその場から消失した。

「えっ、消えた！？」

と驚いて辺りを見回すメイド、春風 千桜。

と言う訳で次回は、昨夜救出&宇宙へ旅立て！をお送り致します。

Story 11・咲夜の救助、宇宙人VS八ヤタVS伊澄（前書き）

CLANNADネタを入れました。

オリジナルの宇宙人が出ます。名前にご注意下さい。

Story 11・咲夜の救助、宇宙人VSハヤタVS伊澄

東京のビッグサイト付近にある海に面した倉庫。

その一角に咲夜は捕らわれていた・・・にも関わらず、犯人に對して言いたい放題言っていた。

「所で自分、ウチを捕らえて一体どないすんねん？もしかしてあれか？身代金の要求か？ほんならウチが払ってやつても良えけどな」

この時、犯人は思った。

（このガキ、自分がどう言う立場に立たされてるのか解ってるのだろつか？つーか、払うって、子どもにそんな金払える訳無いだろ）
「って、聞いとんのか自分？」

「五月蠅えよ。お前、自分がどんな立場に居るか解ってんのか？」

言って犯人は折り畳み式ナイフを取り出してシャキンツと展開した。

「そないな事してただで済むと思わん方が良えで」

「ふっ、助けなんか来ねえから安心しな」

「来るで。ウチが呼べばハヤタはんは絶対来る」

「そうか。じゃあ呼んで貰おう。『助けて、ハヤタはーん』ってな」

「良えで。呼んだる」

そう言つと、咲夜は大きく息を吸い込んだ。そして。

「助けて、ハヤタはーん！」

マジで言つた。

「ダーッハハハハハ。誰も来ねえじゃねえか。ヒーロー漫画じゃあるめえし、呼んだら助けに来るなんて有り得ねえんだよ」

その時、夏奈子を抱えたハヤタがシュインツと音を立てて犯人の背後に現れ、咲夜の顔に悦びの笑顔が浮かんだ。

「お遊びはこれで終わりだ。今あの世へ送ってやる！」

言って犯人はナイフを挙げ、咲夜の左胸に思いつ切り刺・・・そうとしたが、腕が全く動かない。

犯人は恐る恐るその動かない腕に顔を向けた。

手首を何者かに掴まれている。

犯人は顔に冷や汗を掻いた。

「おいたが過ぎるんじゃないか？おめえさんよう」

犯人は背後を顧みた。そこに立っているのは、夏奈子を左肩に抱

えた咲夜の執事代行、朝月 隼太。

「何者だてめえ？」

「俺か？俺は、高校生兼執事代行、朝月 隼太だ！」

そう言ってハヤタは親指を軸に犯人の手首を90度右に回転させた。

ボキッ！ と何かが折れる音がして犯人の腕が90度右に折れた。

犯人は手に持っていたナイフを落として「いってええええ！」と叫んだ。

「よっ」

ハヤタは犯人の手を放し、下に落ちたナイフを蹴り上げた。

ナイフは回転しながら上昇し、咲夜の足を縛っている縄を切断した。そして咲夜の頭上を越え、後ろで手を縛っている縄を切断して地面に音を立てて落下した。

「ハヤタはん、屹度来てくれはると思っとな！」

「何寝ぼけた事言っただ。俺がお前を放置した事あるか？」

「あらへん。所で、夏奈子はんを抱えてんのは何でや？」

「ああ。その事なんだけど、お前宇宙船持つてねえか？」

「持つとるで」

「それは地球から20・5光年先のGillies 581 Cまでのどのくらい掛かる？」

「自分、本気で言うとなんの？そないな所行かれる訳あらへんで。20・5光年言ったら光りの速さで20年と半年掛かるんやで？現在の科学じゃ其処に辿り着く前に死んでしまうで」

「何とかしろ」「無茶や」

「即答するな」

二人が痴話喧嘩をしていると、犯人が拳銃を構えた。

「おい」

「何だよ？」

とハヤタが振り向いて睨み付けた。

「拳銃ってお前、舐めとんのか？」

「舐めてんのはお前の方だ。幾ら強いからってな、拳銃相手には敵わねえんだよ」

「そうか。じゃあ撃ってみろよ」

言ってハヤタは拳を作って中指を立てて相手を挑発した。

神経を逆撫でされた相手は躊躇無く拳銃を発砲した。

カーン！

妖刀カマイタチを手にしたハヤタが既の所で弾丸を弾いた。

「クソーッ！」

パンッパンッパンッパンッ！ と弾丸が連射される。

ハヤタは迫り来る弾丸を全て、カマイタチで弾き飛ばした。

「畜生！」

殺人犯がカチカチと引き金を引いた。だが、弾倉が空になっており、弾丸は発射されなかった。

「へっ、次はこっちの番だな」

そう言ってハヤタはカマイタチを投げ捨てて相手の懐に駆け付けた。

「ふんっ」

相手を空中に蹴り上げて連続キックを1,000発お見舞いし、地面を蹴って空中に跳び上がり、前方宙返りをして相手を右足で地面に叩き付けた。

「ゴフッ！」

そしてバウンドして上がってきた相手を今度は左足で叩き付ける。相手の体が地面に強打され、地面が凹んだ。

ハヤタは綺麗に着地して相手に近付く。

「病院行くか？」

「殺・・・せ・・・」

「あ、そ」

ハヤタは相手を思いつ切り蹴り飛ばした。

殺人及び誘拐殺人未遂犯は勢い良く吹っ飛んで行き、宇宙空間に飛び出して直線上に偶々在った宇宙船に激突した。

その際、宇宙船に穴があき、宇宙船が地球の引力に引つ張られて落下を開始した。そしてハヤタ達の居る倉庫へと墜落してしまった。
「……」

言葉を失うハヤタ達三人。

「宇宙……船？」

咲夜が首を傾げると、宇宙船らしき物体のコックピットらしき場所から明らかに人間では無い何かが出て来た。

そいつの容姿は、腹部に太と書かれた服を着たデブ……としか言い様が無かった。

そのデブがそいつの星の言葉でこう言った。

「おいだの宇宙船に穴をあけたのはお前でプか？」

ハヤタはそいつの言葉を理解し、同じ星の言葉で答えてやる。

「スマン。お前の宇宙船があるとは思わなかったんだ。許してくれ」

「許さんでプ！」

怒ったデブは手を前に出して変な光線を発射した。

「これでお前をおいだの手下にしてやるでプ！」

「当たるかよ」

言ってひらりと身をかわすハヤタだったが、それが失敗であった事に後悔した。

その失敗の所為で咲夜に妙な光線が当たってしまったからだ。

「えっ!？」

光線を浴びた咲夜は、ボンツと一気に太ってしまった。

ハヤタは光線を放ったデブに向かって訊ねる。

「貴様、メタボリック星人だな!？」

「その通りでプ。お前を手下にする事には失敗したが、代わりにお前の後ろに居たその女を手下に出来たでプ」

言ってデブ咲夜を指差すデブ。

「何!？」

ハヤタはデブ咲夜を見た。

「手下一号!この男を殺ってしまうでプ!」

デブがデブ咲夜に命令すると、デブ咲夜は「はい、デブプリオ様」と返事をしてハヤタに飛び付いた。

「逃げる、夏奈子!」

ハヤタは夏奈子を何も無い所へ投げ飛ばした。

「キャッ!」

夏奈子は地面を転がる。

「うわっ!」

ハヤタはデブ咲夜にのし掛かられ、下敷きになって身動きが取れなくなつた。

「くっ・・・重い・・・」

ハヤタはあまりの重さに耐えきれず、気を失いそうになつた。

「頼むから退いてくれ咲夜」

だが咲夜を耳を貸さなかつた。

「無駄でプよ。そいつもうおいだの言う事以外聞かないでプ」

「そうか。なら問おう。お前の言う事しか聞かないって事は、お前自身に従うのかお前の声に従うのか、どっちだ?」

「それは当然おいだ自身でプよ」

「だよなあ。じゃなきゃお前の声使って動かせるもんなあ」

ハヤタはそう言つて苦笑した。

「言いたい事はそれだけでプか?」

ドラゴンハンド
「竜の手!」

ドラゴンハンド
ハヤタは右手を竜の手に変化させてデブプリオの方に伸ばした。
ドラゴンクロー
鋭く尖つた竜の爪がデブプリオを襲う。

「うわっ!」

デブプリオは間一髪避けたが、爪の先が僅かに鼻を掠めた。
「何するでプか!??汚いでプよ!」

「お前なんか右手で・・・っ!？」

その時、ハヤタの竜の手ドラゴンハンドに向かって何処からともなく御札が飛来してきて張り付いた。

ハヤタはその御札が張り付いた手を見て顔を真っ青にした。

(ど・・・何処に居るんだ・・・?)

と辺りを見回すハヤタ。

彼が捜しているのは、天敵の鷲わしのみやノ宮 伊澄である。

「八葉六式、撃破滅却」

ドーン!

ハヤタの竜の手ドラゴンハンドが大爆発を起こし、縮んで元に戻ってしまった。
激痛に悶えるハヤタ。

「誰だか知らないが助かったでプ」

デブプリオは御札が飛んできた方を向いて言った。

彼が向いた先には、物凄い形相でハヤタを睨む伊澄が居た。

「妖怪さん、貴方の相手はこの私がします」

「妖怪じゃねえ!」

「妖怪で無いのならその禍々しい妖気は何ですか?」

と伊澄が指差したのは、紫色の禍々しいオーラを放つハヤタの右手。
手。

「そんな事今はどうでも良いだろ!? この状況を見て判らなければお前は相当のお馬鹿さんだ! 兎に角お前、このデブ男を何とかしろ!」

「妖怪さんにバカにされてしまいました。行きます。八葉六式、撃破滅却」

と伊澄が御札を投げてハヤタの右手を攻撃した。

「ぐおわ!」

激痛に悲鳴を上げるハヤタ。

「てめえ、攻撃する相手が違っただろ!」

「私、何か間違った事しましたでしょうか?」

「泣くぞ俺」

「勝手に泣いて下さい」

その言葉にショックを受けたハヤタは引き攣り笑いで泣いた。

「自分、泣くか笑うかどっちかにせい！」

とデブ咲夜がハリセンを出してハヤタの顔を思いつ切り叩いた。

「操られても突っ込みの勢いは変わらない咲夜であった」

と天の声。

「……………」

ハヤタは無言で顔を顰めた。

「何や自分？怒ったか？」

「なあ、咲夜。思い出してくれないか？俺の事」

「だから無駄だと言ってるのが解らないでプか？」

「俺は分からず屋だからてめえの言ってる事は何も理解出来ねえ」

「バカにしてるでプか？」

「それ意外に何が有る。このデブ野郎が」

「むむむっ、許さんでプ！手下一号、首を絞めるでプ！」

デブプリオがそう命令した瞬間、伊澄がデブプリオに御札を投げ
て張り付けた。

「その妖怪さんは私の獲物です。余計な真似はしないで下さい」

「何でプかあんたは！？」

「八葉六式、撃破滅却！」

ドーン！

大爆発を起こしたデブプリオが真っ黒焦げになって倒れ、頭にお
星様を浮かべて気絶した。

同時にボンツとデブ咲夜が元の咲夜に戻った。

「あれ、ウチどないしてたんや？」

言って咲夜は頭に疑問符を浮かべた。

「あら、咲夜じゃない」

と近付いてくる伊澄。

その伊澄がハヤタの顔の上に乗った。

「伊澄のパンツ可愛いな」

ハヤタがそう言った瞬間、赤面した伊澄が「キヤー！」と悲鳴を上げて下にある彼の顔を思いつ切り踏み付けた。

「げぼふっ！」

ハヤタは気絶してしまった。

「伊澄、ウチの臨時執事に怪我させんといってくれるか？」

「え？この妖怪さん、咲夜の執事なの？」

「否、妖怪じゃあらへんから」

「でもおぞましい妖気をビンビンに感じるわ」

「ああ。それは妖気やのうて執事オーラやな」

咲夜は素でボケてみたが、誰も突っ込まない。

「・・・って、誰か突っ込む奴はおらんか！？」

「っーかてめえらしい加減退けよ！」

と目を覚ましたハヤタが突っ込んだ。

「お、ハヤタはん起きたんか」

「起きたんか、じゃねえよ！」

「ああ、スマン」

咲夜はハヤタの上から退いた。

「伊澄も早う退いてやらんか？」

「そうしたいのは山々なんだけど、妖怪さんのおぞましい妖気に当てられて動けないの」

「だから妖怪じゃねえよ！」

「何か二人とも仲良えな。嫉妬してしまいそうやで」

「変な事言わないで咲夜。仲良くなんて無いわ」

「だあつ、もう！」

ハヤタが強引に起き上がると、伊澄は地面に転がった。

「てめえも何時までも寝てんな！」

ハヤタが黒焦げになって倒れているデブプリオを蹴って起こした。

「痛かったでプー」

「おい、てめえ」

「な、何でプか？」

デブプリオはハヤタの方を向いて体を震わせた。

「お前の宇宙船直してやるから G i l s e s 5 8 1 C まで乗せてけ」

「いやぷー」

ガスン！

ハヤタはデブプリオの顔面を殴った。

「痛いデブ！許さないデブよ！」

怒ったデブプリオが妙な光線を放った。

ハヤタは妖力のバリアを張ってそれを打ち消した。

「てめえのメタボリック光線は俺には効かねえよ」

「クソ、もう一度デブ！」

ハヤタ曰くメタボリック光線を再度放つデブプリオ。だが、またもやバリアを張られて打ち消される。

「アホか。勉強しろっつーの」

ハヤタはガツンツとデブプリオの頭を叩いた。

「痛いデブよ！」

「殴られたくなかったら 0・1 秒以内に G i l s e s 5 8 1 C まで乗せて行くと約束しろ」

「乗せ・・・っ!？」

どくしっ！

デブプリオの顔面にハヤタの蹴りが埋ずまった。

「言えないデブよ！」

「挑戦してただろ。言えないなら蹴る前に言え」

「て言うか、殴られたくなかったらって言ったデブ。お前、明らかに蹴ったデブ」

「突っ込むな！」

ガスン！

ハヤタの拳がデブプリオの顔面に埋ずまった。

「酷いでデブ。手下一号、殺るでデブ！」

しーん、と静まる場。

「どうしたでプか！？殺るでプよ！」

「お前、誰に言ってるんだ？手下一号なんて居ないぞ」

「そこに居るじゃないでプか」

デブプリオは咲夜を指差した。

「つて、あれ？戻ってるでプ」

「お前が気絶したからな。それより乗せて行くか否か決める。それによりお前の生死が決まる」

「乗せるなんて嫌でプ！だからと言って死ぬのも嫌でプ！」

ハヤタはやれやれと肩を竦めた。

S t o r y 11・咲夜の救助、宇宙人VSハヤタVS伊澄（後書き）

劇中でデブ咲夜が言った「デブプリオ」のフルネームはレオナルド・デブプリオです。

三千院家の敷地にある広い空港。

そこに在る飛行機の点検施設で、デブプリオの宇宙船が修理されていた。

「で、何なんだこれは？」

そう訊ねたのはナギだった。

「あそこに居るメタボリック星人の宇宙船だ」

裏ハヤタはそう言って隅で椅子に座っているデブプリオを指差した。

ナギが「ふーん」とデブプリオを見る。

「おい、お前」

ナギがデブプリオに近付いて声を掛けた。

デブプリオは疑問の表情でナギを見る。

「私は三千院 ナギだ。お前の名を覚えてくれないか？」

「???」

言葉が通じなかった。

「おい、聴いてるのかデブ？」

「あ、そいつ宇宙人だから地球の言葉が通じないんだ」

と裏ハヤタがやってきて言った。

「お前、通訳出来るのか？」

「出来る」

「じゃあ頼む」

「嫌だ」

「何！？」

「お前の様な生意気な餓鬼の言うことは聞けないな」

ナギが裏ハヤタを睨んだ。

「何だ、やるか？」

裏ハヤタがナギを睨み返した。

バチバチと火花が散る。

「あの、二人とも。喧嘩はやめようよ」

そこに割り込んだのは、表ハヤタだった。

「お前、居たのか」

と裏ハヤタ。

「ずっと居たよ」

「影薄いな、お前」

とナギ。

「ひ、酷いよ三千院さん」

言って表ハヤタは泣き出した。

「泣くな！」

裏ハヤタが表ハヤタの頭をグーで殴る。

その直後、宇宙船の修理が終わって声が掛かった。

「皆さーん、宇宙船の修理が終わりました！」

裏ハヤタは作業員の方を向いて「ご苦労」と一言口にした後、デブプリオの方を向いた。

「よし、デブプリオ。約束通り俺たちを乗せていけ」

デブプリオはムカつく顔で「いやぶー」と言った。

「そうか、死にたいか。なら殺してやろう」

言って裏ハヤタは光弾を手の平に作ってデブプリオに向けた。

「や、やめるでプ！連れていくでプ！」

扱い易い奴だった。

「よし、お前ら。乗り込め」

裏ハヤタがそう言うと、ナギ、マリア、ハヤテ、タマ、咲夜、伊

澄、表ハヤタ、夏奈子が宇宙船に乗り込んだ。

「おい、デブ。お前が乗らなきゃ動かせないだろ」

「デブ言っただけでプ！」

怒ったデブプリオが変な光線を放った。

裏ハヤタは「あらよっ」と避ける。

「貴様の技は食らわねえ。残念だったな」

「くっ・・・」

「っ！早く乗れ」

裏ハヤタはデブリリオを宇宙船に放り込み、乗り込んだ。

そして宇宙船は滑走路に出て宇宙へ飛び立った。

「デブ、G i l e s s e 5 8 1 c までどのくらい掛かる？」

「そんなの教えないでプ」

「あ、そ。じゃあお前の心を読むとしよう」

裏ハヤタはデブリリオの頭に手を置いた。

「成る程。20年と半年か。遅い！もっと早く着かないのか！？」

「ワープを使えば一瞬で行けるでプが、お前の為にワープなど使いたくないでプ」

ポチッ

裏ハヤタは側に在った赤いボタンを押した。

するとワープが起きていつの間にかG i l e s s e 5 8 1 c の

目の前に来ていた。

「なっ、勝手に押すなでプ！」

「ああ？」

裏ハヤタはデブリリオを睨んだ。

「ひいいっ！」

裏ハヤタの恐ろしい顔を見たデブリリオの顔が真っ青になった。

「着陸しな」

「無理でプ。今のワープで燃料が空になったでプ」

言ってデブリリオは燃料の残量計を指差した。

そこには0%と表示されていた。

「これからこの宇宙船は墜落するでプ」

「何！？」

その途端、宇宙船がガコンツと揺れて落下を開始。G i l e s s e

5 8 1 c へと墜落した。

ドカーン！

墜落した宇宙船は轟音と共に巨大なクレーターを作り上げた。

その衝撃で、宇宙船に乗っていた者は全員、船外へ飛び出した。
ズボッ！

裏ハヤタが墜落現場からかなり離れた場所の地面に埋まった。
ポンッ！

地面から抜け出した裏ハヤタは宇宙船の方を見た。
その先には米粒並の宇宙船が在る。

「随分と飛ばされたな。何処だ此処？」

裏ハヤタは辺りを見回した。
すると警報が鳴り、ライフル銃を持った兵隊達が続々とやって来た。

「侵入者だ、撃て！」

どうやら此処は軍隊の基地のど真ん中らしい。

（やっべえな）

裏ハヤタは両手を上に挙げた。

「何者だ貴様！？」

兵隊の一人が裏ハヤタに詰め寄って訊ねる。

「セイバートロン星と聞いて何か判らないか？」

「なっ、貴様、セイバートロン星を征服しようとしたならず者か！
この星にも貴様の情報は届いているぞ！」

「だからどうした？」

「生きたままセイバートロンに送り付けてやろう」

「やれやれ。お前たちは俺を舐めているようだな」

「何だと？」

シューイン！ その音と共に、裏ハヤタの姿が消え、瞬く間に全ての兵隊達は倒されて行った。

残ったのは裏ハヤタに詰め寄った一人の兵隊のみ。

「ば、化け物だ！」

兵隊はそう叫んで逃げようとしたが、裏ハヤタに頂を掴まれてしまった。

「逃げないよな？」

兵隊は顔を引き攣らせて「逃げません」と宣言した。

「ようし。早速だがお前に問おう。此奴に似た奴を見てないか？」
そう言って裏ハヤタは夏奈子の写真を見せ付けた。

「こ、この方なら、うちの施設で働いてますよ」

「そうか。それにしてもこの星は良いな。空気も澄んでるし、屹度異星人に高値で売れるだろうな」

「ま、まさか、この星を制圧する気ですか？」

「しねえよ。つーか、それ本当なんだな？」

「な、何がですか？」

「この写真の奴に似た人物だ」

「え、ええ。ですから、うちの施設で働いていると」

「案内・・・っ!？」

その時、裏ハヤタの内なる竜ドラゴンが共鳴をした。

（居るのか、あいつが!？）

「あの、どうかしたんですか？」

「悪い、この話しは無しだ!」

裏ハヤタはそう言々と宇宙船の方へ飛び去っていった。

裏八ヤタ、間接的にヒナギクと再会しました。

Story 12・ヒナ、ハヤタに再会する

宇宙船の回りには、伊澄を除いた乗組員全員が集まっていた。

「おい、あの霊媒師は何処だ？」

裏ハヤタはそうハヤテに訊ねた。

「さあ。屹度、また迷子になってるんでしょう」

とハヤテが答える。

「そうか。なら問題無い」

「どう言う意味ですか、それ？」

「俺はあいつが嫌いなんだ。だから居ないと清々する」

裏ハヤタがそう言っていると、伊澄がひよっこり姿を現した。

「あのー、私が居ないとどうして清々するのでしょうか？」

「うおっ、お前何処に居たんだ!？」

「ウチが見付けて来たんや。感謝せい」

と咲夜が裏ハヤタに言う。

「見付けてくるなよ!？」

「何でや？」

「嫌いだからだ」

「何でや？」

「俺を妖怪と見なして攻撃して来るからな」

「なあ伊澄、あんまウチのハヤタはん虐めんといてくれへんか？」

「別に虐めてません。私はただ、六式使いの使命を遂行^{すいこう}してるだけです」

「使命ねえ・・・」

とその時、施設の方からドカーンと爆発音が聞こえた。

振り向くと、施設が黒煙を出して炎上していた。

裏ハヤタはその施設に向かって飛んでいった。

その後を、デブプリオを除いた全員が後を追った。

「今の内に逃げるデブよ。この隠していた燃料で」

デブプリオはそう言うと、宇宙船の燃料タンクに燃料を流し込んで宇宙船に乗り込み、宇宙へ飛び立った。

炎上中の施設。

そこでは沢山の衛兵たちが、巨大な緑の竜・グリーヴァを相手にライフルを撃ち込んでいた。

グリーヴァは大きく口を開け、衛兵たちに火の玉を吐く。

「うわああああ！」

衛兵たちは炎に包まれ数が激減する。

「クソッ、化け物だ！退け！」

攻撃を逃れた衛兵たちは、慌ててその場から逃げ出す。

「グワアアアア！」

グリーヴァは雄叫びを上げ、太くて長い尻尾で逃げ惑う衛兵たちを薙ぎ払う。

「八葉六式」

刹那、グリーヴァの尻尾目掛けて御札が飛来し次の掛け声が掛かる。

「撃破滅却！」

ドーンッ！

御札が爆発し、グリーヴァの尻尾攻撃を防ぐ。

「皆さーん、大丈夫ですかー？」

と伊澄がやって来て訊ねる。

しかし衛兵たちは何を言ってるのか解らず、首を傾げた。

「グワ！？」

グリーヴァは伊澄を見ると驚き飛び退いた。

「罪も無い人々を傷付けるなんて許せません。妖怪さん、覚悟！」

言って伊澄は御札をグリーヴァに投げた。

「八葉六式、撃破滅却！」

その掛け声と共に、仮面を着けた謎の人物が現れて御札の行く手

を阻む。

ドカーン！

御札は謎の人物に当たって大爆発を起こした。

「うわっ！」

謎の人物は吹っ飛び、背中をグリーヴァにぶつけて落下した。

グリーヴァは落下していく謎の人物の下に手を入れてキャッチした。

謎の人物は立ち上がり、グリーヴァを見ながら言う。

「何が遭ったかは知らんが、取り敢えず元に戻れ」

すると、グリーヴァの体が小さくなっていき、ヒナギクの姿になった。

（やっぱりな）

と謎の人物は頭を抱える。

「あなた、ハヤタくんなの？」

ヒナギクは謎の人物に近付きそう訊ねる。

しかし謎の人物は首を横に振るってこう答えた。

「違う。私はMorning moonだ」

.....

沈黙が暫し場を支配した後、ヒナギクがそれを破る。

「直訳じゃない！て言うか顔ぐらい見せなさいよ！？」

そう怒鳴ったヒナギクが謎の人物の仮面に手を伸ばした。しかし、謎の人物は抵抗する。

「ヒナギクさん？」

とそこに現れたのは表ハヤタだった。

「え？」

ヒナギクは表ハヤタを見て固まる。

「すみません！人違いでした！」

ヒナギクは謎の人物に頭を下げると、表ハヤタの下に駆けつけた。
「ハヤタくん！」

と表ハヤタに抱き付く。

「ちよつ、恥ずかしいつて」

表ハヤタは頬を赤らめながら言った。

裏ハヤタは二人を見ながら「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6771c/>

ハヤテのごとく！～愛沢 咲夜と愉快的仲間たち～

2010年10月9日03時55分発行